

みち ふうけいち おくのほそ道の風景地 な た でらけいだい きせき 那谷寺境内 (奇石)

種 別 名勝 (国指定)
指定年月日 平成 26 年 3 月 18 日
所 在 地 那谷町 (那谷寺)

高野山真言宗の寺院である那谷寺は、養老元年 (717 年)、白山を開いた泰澄^{たいちよう}が境内の岩窟内に千手観音像^{せんじゆかんのんぞう}を安置したのが始まりとされ、当初は「自生山岩屋寺^{じしやうざんいわやでら}」と称した。その後、寛和年間 (985~987 年) には、西国三十三所の巡礼を終えた花山法皇^{かざん}が当地を訪れ、三十三所の一番霊所である那智山^{なちさん}の「那」と三十三番霊所である谷汲山^{たにくみさん}の「谷」をとって「那谷寺」と名付けたと伝えられている。

元禄 2 年 (1689 年) 8 月、松尾芭蕉 (1644~1694) が当地を訪れ、『おくのほそ道』で次のとおりに那谷寺について触れ、俳句を詠んでいる。

(中略) 奇石^{こしやう}さまさまに、古松^{こしやう}植えならべて、萱^{かや}ぶきの小堂、岩の上に造りかけて、殊勝^{しゆしやう}の土地也。

石山の石より白し秋の風

松尾芭蕉は、古歌にまつわる歌枕の名所及び由緒・来歴の地を訪ねて陸奥・北陸路を旅し、紀行文学の傑作『おくのほそ道』を完成させた。芭蕉が『おくのほそ道』に書きとめ、俳句を残した場所の多くは、近世・近代を通じて広く観賞の対象として知られ、今なお優れた風致景観を誇る。

その 1 つである那谷寺境内には、そそり立つ奇石に洞穴が開口している場所があり、石が織りなす自然の造形美が、周囲の木々や本堂の外観と組み合わせきって、四季折々に優れた風致景観を形成している。芭蕉は、秋風を感じつつ、この風光明媚な奇石の景色を見て「石山の石より白し秋の風」と詠んだのである。

「那谷寺境内 (奇石)」は、「おくのほそ道の風景地」を構成する一群の風致景観の一つとして優秀であり、その観賞上の価値は高い。



↑ 那谷寺境内に立つ芭蕉句碑

← 那谷寺境内の奇石